読売歌壇

小池　光　選

炭焼になれと言はれし故郷に蕗の薹摘み一日を過ごす　　みどり市　金子　三郎

【評】ものしずかで忍耐ぶかい少年だったのだろう。炭焼きになったらどうかと言われたことがあった。星霜幾十年、いまふるさとの野山にフキノトウを摘む。感慨止まず。

全身で点検詐欺に向ひをり横綱土俵入の写真を掲げて　　市川市　安田　恭子

【評】最近点検詐欺というものがあらわれてついひっかかりそうになる。一人暮らしの高齢の方だろう。がんばって抵抗した。横綱の土俵入り写真が助けてくれた。おもしろい。

集合にひとり足りない動物園ゴリラの柵に張り付く男の子　　調布市　川久保洋子

【評】小学校の低学年か。遠足は動物園。集合時間が来ても一人いない。ゴリラに見とれていたのだ。将来大物になりそう。

起き抜けの心の底に流るるは夢のなごりか「青い山脈」　　松戸市　山田　好司

若き医師は明日の天気を言う様に夫の余命を五年と云いぬ　　武蔵野市　松本みよ子

あの時に一生大事にするからと言ひましたよねどこかの誰か　　匝瑳市　椎名　昭雄

初場所も終はり野球も始まらぬ梅の蕾を庭に眺めむ　　岡山市　岩藤由美子

酔いながら見上げる夜空でわかること月はひとつで私もひとり　　守口市　小杉なんぎん

清潔な声というのはこの人ぞ三浦洸一　ああ船が出る　　草加市　新井美智子

遠く住む友とメールに交わしおり今日の歌壇の好きな一首を　　福山市　金尾　淘子

栗木　京子　選

ウグイスの鳴き声を待つ隣家の樹わが家の春は左の耳から　　東京都　岸浪　三蔵

【評】左隣の家に樹木が生えており、そこから聞こえるウグイスの声が春を知らせてくれる。声から訪れる春は趣が深い。「左の耳から」と方向を示したのが巧みである。

今年また飲めや歌えのお祭りを園児とすごす七段飾り　　川崎市　長嶋　季伸

【評】上句だけ読んだときはどのような宴会かと思ったが、結句まで来て園児たちと雛祭りを祝ったことがわかる。飲んだのはノンアルコールの白酒か。楽しい場面である。

隣町の書店に孫の絵本選るビニール包装寂しみながら　　鹿嶋市　大熊佳世子

【評】隣町の書店まで行かねばならず、包装されているので本の中身を確認できない。致し方ないものの一抹の寂しさが伝わる。

特大の数字に圧倒されているヘルパーさんから貰いし暦　　大船渡市　富谷　英雄

一歳は降る雪を頬にすべらせて何を思うや神妙なりき　　高槻市　山口佐智子

半分は薬と湿布が占めているかばん転がしハワイの旅へ　　大阪市　吉田　成美

残りしはたった五人の老部員その手で幕ひく卓球クラブ　　和歌山市　若野　順子

三日目の返信メールに安堵する喧嘩の思い出多き妹　　尼崎市　吉岡由美子

スーパーで虫眼鏡持ち値段見る父に似た人今日も来ている　　草加市　入江　幸子

太陽にてのひら翳し歩みゆけば不眠の悩みとけゆくごとし　　枚方市　鍵山奈美江

俵　万智　選

校庭ののっぺらぼうの文字盤を秒針となり走る少年　　高島市　宮園佳代美

【評】校庭を、ひたすらぐるぐる走る少年。そこに文字盤のない時計を見つけた作者の眼差しに打たれる。「のっぺらぼう」からは少年の孤独が伝わるが、彼にしかわからない時間が今、確かに刻まれているのである。

行きたいと思うところが違うから広がっていく僕らの世界　　大和郡山市　本田　岳

【評】意見の違いを、実に前向きにとらえていて、素敵だなと思う。二人でいれば、行きたい場所は二倍になるのだ。

子の額に手を当てるように鉢植えの土の乾きを確かめる朝　　福岡市　内田　敬子

【評】直接、生身の自分の手を当てて、様子を感じ取る。確かで愛情に溢れた方法だ。植物を大事に思う気持ちが、温かく伝わってくる。

本を読む時間も付けて本を売る本屋があれば本を買うのに　　東京都　武藤　義哉

幸せに壁はないって気づくまでボルダリングのまねごとしてた　　東京都　芦田　晋作

痛ければそうしてくれと教わって一人の夜に手を挙げてみる　　下関市　猫背の犬

その声のやすりのようなざらつきに磨かれたこと傷ついたこと　　東京都　葉山　あも

初稽古終へたる子等の素足よりほのかに湯気ののぼる道場　　座間市　遠藤　寛

月裏には自動販売機があって春のサイダー僕を待ってる　　吹田市　崎島スジオ

舟なんて来やしないんだ雪の日の満員通過の都バスみたいに　　東久留米市　中里　正樹

黒瀬　珂瀾　選

色だけで選ぶ〈彩りサラダ〉かな夜のファミマは光りすぎてる　　所沢市　里見　脩一

【評】その品質や成分よりも、ぱっと見の第一印象で買われる商品たち。煌々とした灯りに満ちたコンビニはまさに、世にあふれる商品の展示場。私たちは何を食べているのか。

亡き友の香典返しギフトから鰻が届く今宵は一献　　東京都　佐藤　一郎

【評】香典返しのカタログも世間に定着。鰻も注文できるのですね。そして今夜は鰻を肴にして、亡き友と一杯やるのでしょう。

小六の女孫は受験突破せり犬抱きよせて深く眠りぬ　　狭山市　牧口ケイ子

【評】合格おめでとうございます。犬と女児との信頼関係が温かく描かれました。受験を突破した安堵や、ようやっと緊張感が解けた様子が伝わってくる、祝意ある一首です。

人々を見守り続けし紅葉楓切り倒されて日溜りのこす　　岩国市　須山佳代子

寛解からちょうど一年うどん屋で夫はかき揚げトッピングする　　新発田市　片山恵美子

片方ずつ君と拭いてたガラス戸をひとり拭くとき涙こぼれぬ　　豊橋市　坂部　さち

何ゆゑに吾は生れたるや厨房にひかりて美しき一本の葱　　尾鷲市　中村　東太

胡麻和えの胡麻粒残らず食べながらまた金沢へ行こうと話す　　千葉市　佐藤　綾子

「あなたには短歌がある」と母が言いそれからうまく歌を詠めない　　東京都　日柄りょう

刺すような仁王の視線どこまでも参拝の我を追いかけてくる　　富山市　荒井ゆみ子

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇次回は17日（月）掲載　右の影絵はめきゃべつ